
お兄ちゃん！どいてそいつ殺せない！！

かごのとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お兄ちゃん！どいてそいつ殺せない！！

【Nコード】

N0884W

【作者名】

かごのとり

【あらすじ】

あの女を見た瞬間に、妹の歯車は壊れた。

シャキン…シャキン…シャキン…

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん…」

「何で、何故、如何して…昔はもつと構ってくれたのに」

「いつも遊んでくれたのに…一緒にご飯を食べていたのに…一緒に
お風呂に入ってたのに…一緒に…一緒に…」

「いつから…いつから…いつから…」

シャキン…シャキン…シャキン…

少女はブツブツと言いながら、目の前の熊のヌイグルミにハサミ
を入れる。

既に首は皮一枚で繋がる程度で、中の綿がはみ出ている。

両腕両足は完全に切り落とされ、胴体はもはや胴体の意味をなさ
ないほどに切り刻まれていた。

両目は割り貫かれ、顔は数え切れないくらいの穴が空いている。

シャキン…シャキン…シャキッ！

「…そうだ。あの女だ。何時の間にかお兄ちゃんの彼女を名乗った
あの女が…」

「あの悪魔のような女が…、あの魔女が…、お兄ちゃんを私から…」
「お兄ちゃんの隣…私の場所を奪ったんだ…」

少女はハサミを止めると、無残に綿が剥き出しになった人形で有
ったものを抱き上げる。

そして、改めて持ち直すとハサミを突き刺す。

何度も…何度も…

「…そつか。お兄ちゃん、騙されてたんだ。…そうだよ。それしか、考えられない」

「だって、お兄ちゃんが…あんなに優しいお兄ちゃんが私のこと避けるわけではないもの」

「お兄ちゃんが変わったんじゃない、あの女に変えられたんだ。そうよ、絶対そう」

「だって、お兄ちゃんと私はずっと変わらない。ずっと…ずっと…二人だけの兄妹…」

「あの時約束したもの…。そんなお兄ちゃんを…無理矢理変えた…あの女…」

「許さない…許さない…許さない、許さない、許さない、許さない許さない許さないゆるさないゆるさないユルサイユルサナイ…」

ブチリと言う鈍い音を立てて皮一枚で繋がっていた首が完全に切り離される。

嫌、最早少女には見えていなかった。

人形であったものの残骸を掴むと、放り投げる。

壁にぶつかり部屋の隅に投げ出される残骸。

その残骸もまた、既に有った残骸の山を大きくさせるのだった。

その日は雨だった。

酷い雨。

傘をさしてもあまり意味をなさないような酷い雨。

何処か焦点の合わない目で帰路へと急ぐ少女。

兄と学校へ行つたまでは良かった。

昼休みにお弁当と一緒に食べようと兄の教室へ行つたときから歯車が狂い始めた。

私の先回りをするようにあの女が…。

あの女が、またお兄ちゃんを少しずつ少しずつ狂わせて行くんだ。そんな私を心配してくれる友達。

でも、その友達のお陰で帰るのが遅くなってしまった。

普段は良い友達なのに…お兄ちゃんの為の私の行動をする時は煩わしくって仕方が無い。

もしかして、あの子もお兄ちゃんに…そうかもしれない。

…私からお兄ちゃんを奪おうとするなら…あの子も友達じゃない。

そう考えながら、帰路を急ぐ。

「早く帰らなくちゃ…。この雨じゃ、お兄ちゃん風邪引いちゃうかもしれない」

「お風呂を沸かしておかないと…。お兄ちゃん、一人じゃ何も出来ないもん」

「お兄ちゃんのお世話は…私が…私だけがするんだから」

漸く辿り着いた家。

慌てて鍵を取り出すが、鍵を差し込む前にドアが開いている事に気付いた。

ドアを開けると其処には兄の靴と見知らぬ女物の靴が並んで置いてある事に気付く。

少女はフラフラと視線を移す。

そして、暫く動転していたが我に返るとゆっくりと歩みを再開した。

足音を立てぬように、ゆっくりゆっくりと。

そして、自分の部屋に戻ると机の一番下の引出しを開ける。

中から取り出したのは一つのスタンガン。

少女の手には少し大きい無骨な形をした黒いスタンガンだ。

一度、スイッチを入れるとバチバチという音を立て、問題なく使えることを確認する。

それを片手にゆっくり、ゆっくりと兄の部屋へと進む。

兄の部屋からは僅かに洩れる明かりと声。

「ねえ…さっき、音しなかった？」

「さあ。気のせいだろう？」

「でも、妹さん…帰ってくるかもしれないでしょ？」

「構うか。もし帰ってきてても、見せ付けてやれば良いさ」

「アイツ、最近変だからな。俺のこと慕ってくれるのは嬉しいが行き過ぎてる」

「諦めてくれれば、助かる」

「ちよつと…、そんなことの為に…」

「いいじゃん。お前も…見られたほうが興奮するだろ？」

「ちよつと…アンツ！」

そんな言葉が少女の耳に届いた時、狂った歯車がガチリと音を立てた。

歯車は完全に音を立てて壊れてしまった。

そして、それとは別の歯車が新たに生まれる。

その歯車は、これまで動いていなかった部分とつながり新たな回路を動かしていく。

ドクンドクンと言う心臓の音。
それが何を意味するのか少女には理解する間もなく兄の部屋の扉を開ける。

ボタン

音を立てて開かれる扉。

そこで、少女が見たのは兄の上に覆い被さる女の姿。
昇っていた頭の血が一気に冷め、スタスタと二人に近づく。

「きゃっ！」

「お前っ！」

「アンタの…アンタの所為でっ！」

妹は持っていたスタンガンを女の首につき立ててスイッチを入れる。
る。

数秒間、スイッチを入れればすぐさま女の動きが止まり、そのま
ま兄の体に倒れかかった。

「お前、何をっ！」

「お兄ちゃんは…騙されているの…この女に…」

「この女は、お兄ちゃんと言う木に群がる害虫。だから、木に羽を
休める鳥である私が…取り除かなきゃ」

「何を行って…」

「お兄ちゃん、ゴメン。少し、寝ていて…」

「起きた時には…全て…全て終わってるから…」

そう言うと妹は兄にもスタンガン突きつける。

兄はそれを避けようとするが、倒れかかった女の所為で上手く動けない。

そして、そのままスイッチを入れた。

瞬間、兄は痙攣を起こしそのまま仰向けに倒れた。

「ゴメン…お兄ちゃん。大丈夫、私が…私が癒してあげる。清めてあげる」

首筋に生温いものが当たるのを期に兄が目覚めます。

そして、目を見開いた其処には裸の妹。

その妹が、ペロペロと首筋を舐めているのだ。

「な、お前…」

「お兄ちゃん、気付いたの？ごめんね、痛かったでしょ」

「私が舐めて癒してあげる。だから、さっきのことは許してくれると嬉しいな」

「何を言ってるんだ。お前、やめろよ」

「お兄ちゃんが怒るのも無理ないよ。それだけのことを私はしたんだもの」

「だからこそ、傷が癒えるまでずっと舐め続けてあげるよ」

「止めろつて。な、なんだ。体が動かない」

兄は慌てて体を動かそうとするが体が拘束されて動かなかった。唯一、動く首を動かすと両腕と胸が紐によってベットに無理矢理拘束されている。

腰や足にも紐の感触を感じる事ができ、全身を拘束されていることに気付かされる。

兄は冷や汗を流しながら狂ったように口を開く。

「お前、何考えてるんだよ」

「私？私の考えてる事が知りたいの？嬉しい。いいよ、教えてあげる」

「私はね、お兄ちゃんのことを考えているの。お兄ちゃんのことを…お兄ちゃんの事しか考えてないよ」

「何を言ってるんだよ。…そうだ、アイツは」

そう言った瞬間、一瞬妹の顔が歪む。

その表情を見た瞬間、兄の顔は凍りつく。

いままで、そんな表情の妹を見たことは無い。

嫌、そんな表情をするような子ではなかったはずだった。

「お兄ちゃん、あの女が心配なの？」

「あんな女のことなんて忘れて。私のことだけ見てよ」

「何を…お前、何を言って…」

「お兄ちゃん、私はお兄ちゃんのことだけを考えてる。だから、お兄ちゃんも私のことだけを考えて」

「バカ、兎に角この紐を解け」

「解かなくても大丈夫。これからは私がお兄ちゃんのお世話を全てしてあげるから」

「ご飯の用意もお風呂も…勿論トイレだって全て私が…」

「いい加減にしろっ！それと、アイツに何をした。何かしてたら、幾らお前でも許さないぞ」

「お兄ちゃん…あの女に騙されて…狂わされちゃったんだね」

「大丈夫…私が正氣に戻してあげるから。私が全て清めてあげる」
「あの女に毒されたものを全て…」

そう言うつと、妹は唇を首筋に近づける。

そして、それにフツと息を吹きかけた後、チュツとキスをする。
そのまま、ゆっくりゆっくりとアイスクャンディーを舐めるように舌を這わせ始める。

「お兄ちゃん、大好き…」

「バカ、何を…」

「ダメ？わかった、私初めてだけどキレイにする為だもん、頑張るよ。だから、いつでも出してね」

そう言うつと、ハアと熱い息を洩らした後再び首筋を舐め始めた。
たどたどしく舌を使いながら、首から頬に口そして胸へと。

妹は一時間ほど続けた後、体から舌を離し兄の方へと向き直る。

「お兄ちゃん、これできれいになったよ…」

「ま、満足したなら…とつとと、解け」

「お兄ちゃんはまだ動く事は無いの。いったでしよ、全て…私がお世話するって…」

「俺は…お前が追い出した、アイツを…探さなきゃならねんだよ。解けったら、解けっ！」

「お兄ちゃん…まだあの女に…捕らわれて…」

「やっぱり、もっとキレイにしなきゃ。洗剤…いるのかな…」
「あ、そうだ…」

そう言つと妹は兄の腹の上を跨ぐ。

その意図に気付いた兄は慌てた様子で口を開いた。

「お前、まさかつ！」

「お兄ちゃん、私の処女…あげるね。処女の血って特別なんだよ。だから、洗剤の代わりにもなるかも…」

「うん、お兄ちゃんを狂わせたあの女の毒素を清めることができるよ」

「止めろっ！」

「お兄ちゃん、心配してくれるの？でも大丈夫。私、お兄ちゃんに処女を捧げる気だったから」

「お兄ちゃんの初めてにはなれなかったけど…。あの女の毒を中和できるなら…」

「止めろっ！」

「いいの。それに、見せ付けてやればいいでしょ。あの女に…」

「そうすれば…、あの女はお兄ちゃんを諦めてくれるかも知れない…」

「それに…私、お兄ちゃんとのなら…誰に見られても構わないよ。その方が興奮するかもしれない…」

それが先ほど、兄自身が言っていた言葉だと兄は気付いたのだろうか。

しかし、それ以上に兄には何を言っているか分からなかった。見せつける？誰に…まさか…

「アイツは…ここにいるのか？」

「何を言ってるの？お兄ちゃん」

「あの忌々しい女はずっとそこにいるじゃない」

そう言っただけで兄の頭の少し後ろを見る。

兄はつられてそちらに視線を移した。

瞬間、全てが凍りついた。

其処にあったのは…女の首。

目は剥き出しになり恐怖の表情のまま、もう動く事の無い…首。

「わあああああああああつ！」

「お兄ちゃん、喜んでくれた？」

「じゃあ、見せ付けようよっ！」

「あの女に！私とお兄ちゃんの一つになるところっ！」

「どうやって、もうお兄ちゃんとは繋がれないもの。羨ましい？羨ましいでしょ？」

「貴女はそこで見続けるの。お兄ちゃんがここで私にお世話される所を…SEXするところ」

「おんう...おんう...おんうおんうおんうおんうおんうおんうおんう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0884w/>

お兄ちゃん！どいてそいつ殺せない！！

2011年10月9日14時22分発行